# パリオリンピックにおけるスポーツクライミングの成果

安　井　博　志（(公社)日本山岳・スポーツクライミング協会）

## １．東京2020オリンピックからパリ2024オリンピックまでの経過

東京2020オリンピック終了後、国際スポーツクライミング連盟（以下、IFSC）は東京大会で実施されていた複合種目（リード種目・ボルダー種目・スピード種目）をパリ2024オリンピックではボルダー＆リード種目とスピード種目の２種目開催にすることを発表した。これにより、選手達はより専門種目の強化をすることが必要となった。

ただ、日本では2008年から国民体育大会（現国民スポーツ大会）山岳競技で「リード種目、ボルダリング種目」の２種目で開催していたためなじみのある種目でもあったため私たちも選手達も大きな動揺はなく、むしろこの変更を歓迎する雰囲気はあった。またスピード種目は2016年から本格的に強化をスタートしていたが、ある程度の強化方法については明らかになっていたが、スピード種目についてはまだまだ発展の余地があることも把握していたためさらなる試行錯誤を求められることとなった。

### １）ボルダー＆リード種目の強化

先に述べたように国民体育大会の影響で日本選手は基本的に「リード種目」「ボルダリング種目」を練習している選手達は多くいた。ただし、この２種目を世界レベルで戦っている選手はほぼ皆無で専門的に１種目に取り組んでいる選手がほとんであった。オリンピックで勝つためには両種目で世界トップレベルである必要があり、これまでの取り組みをさらにブラッシュアップして取り組む必要があった。

まず、最初に行ったことは日本代表チームの構成を見直し、そのチームを決定する選手選考基準を大幅に変更することであった。それにより両種目に熱心に取り組む高いレベルの選手を「オリンピック強化選手」という枠組みで最重要な強化選手と位置づけ強化方針に対しての理解を促した。初めはその強化方針に違和感を持つ選手達もいたが、次第に浸透していき日本代表チーム内でオリンピックへの取り組む意識や活動が大きく変化していった。

また両種目を強化するためには１種目に取り組んでいたときとはトレーニングしなければならないことやトレーニング量を大幅に増やす必要があった。選手たちにはよりタフになることを求めながら両種目へのトレーニングを進めていった。さらに、ボルダー＆リード種目のルールは課題やルート内に設けられた高度ポイント（両種目それぞれ最高100点の合計200点で競い合う）で競い合うこととなった。何度

集合写真　©JMSCA

か複合大会を経験する中で特にリード種目でのポイントが勝敗を分けることが認知されたため選手達はボルダー種目よりもリード種目の強化に重きをおく必要があることを理解していった。

**２）スピード種目の強化**

2016年１月にイタリアへ日本代表チームを派遣し、そこでイタリアとフランスという強豪国から基礎的な知識や技術を学んだ。このようにすでにトップ選手を育成している諸外国に学ぶことが選手強化を最短で行う方法であった。また、日本国内に全くなかったスピード施設も2016年秋から徐々に整備されて現在は国内に16ヶ所整備された。

2017年からは強化委員会で「スピード強化プロジェクト」を開始し、国内ランキング（自己ベストタイムによる順位付け）や協会主催の記録会を実施しスピード種目の強化を本格化させてきた。これにより200人を超える選手達がスピード練習に取り組み日本国内での競争を活発化させることにより強化を図った。

またＪＳＣのサポートを利用し、世界トップ選手の動きの分析を2017年秋からスタートした。国際大会へ映像分析スタッフを派遣し、撮り溜めた膨大な競技映像を日本選手のタイム更新に結びつけるため科学的な視点から解析し「どうしたら速くなるか？」を模索し続けた。さらに、2018年からはロシアなどの世界トップで活躍している選手・コーチを日本代表合宿に招聘し、理論的な理解や強豪国の実践的な取り組みを学んだ。しかし、多くの選手がスピード種目に取り組んだのは、東京2020大会では複合種目の中にスピード種目があったからで、パリ2024オリンピックで単種目になった際に専門的に取り組む選手を確保することが重要であった。予想通り、東京大会終了後はスピード種目の選手数が大幅に減少した。ただ、2018年から日本スポーツ振興センターの委託事業であるアスリートパスウェイ戦略的支援事業を活用して岩手県、鳥取県、愛媛県の３県で選手育成をしていたためこれらの選手が中心となり、スピードクライミング日本代表選手達はある程度のレベルを維持してパリ大会へ臨むことができた。最終的にはパリ大会への参加はできなかったが、世界大会で表彰台へ上がるなど世界トップと戦うためのレベルに到達する選手強化を行うことができた。本競技は不確定要素が多いためテクニックと実戦で強化をするだけではオリピック予選シリーズで勝ちきるための経験を得るには時間が足りなかったように感じている。

**３）国際大会を利用した強化**

パリオリンピック強化選手にはIFSCワールドカップシリーズのボルダー種目とリード種目の両種目へ優先して出られるようにした。それにより国際大会を利用した選手強化を実施し、自信をつけさせた。これは実戦の中で鍛えることが最も大切な強化策であると考えているからで、いくら練習したとしても選手達の成長は実戦で見られると信じているからである。また多くの選手たちが切磋琢磨することで2023年からはボルダー種目とリード種目の２種目において国別ランキング１位のチームになった。

これにより多くの日本選手が世界トップレベルの競争力を持ち、特に男子選手の選手層は厚くなり、チームレベルを大きく上げることができた。改めて国際大会が選手たちを育てる場であることを痛切に感じた。

パリオリンピック参加選手の選手選考は国際オリンピック委員会と国際スポーツクライミング連盟が定めたルールによって選考された。パリ大会の１年前に開催された世界選手権ベルン大会から選手選考がスタートし、パリ大会の直前に上海とブダペストで初開催されたオリンピック予選シリーズで選手が

選考された。日本からは男女B&L種目が最大枠数となる男女２名ずつが選出され、スピード種目では参加枠を獲得できなかった。

## ２．パリオリピック本番へ向けた準備

### １）チームスタッフ構成

大会会場へのアクセス可能なスタッフは４名であったが、サポートスタッフを５名配置し、選手の輸送・ケア・分析などをチーム全体でカバーした。

### ２）直前トレーニング

パリ大会の１年以上前からトロア市のトレーニング施設とパリ市内のクライミング施設を利用できるように準備していたが、これらの施設を利用しないで最終的には競技直前ギリギリまで日本で調整をおこなった。選手達は海外遠征に慣れていることから良い判断であったと思う。また現地で準備していただいた日本食が大変よかった。選手村の食事は口に合わなかったため非常に助かった。

## ３．パリオリンピック本番

【８月５日　男子Ｂ＆Ｌ ボルダー準決勝】

大会初日は男子Ｂ＆Ｌ種目のボルダー種目が行われ、安楽宙斗が１位、楢崎智亜が２位に入り２人とも好発進した。

20人が出場した準決勝では、ボルダーラウンドは４課題すべての難易度が高く、初完登が記録されたのは18番手のヤコブ・シューベルト（オーストリア）。

ボルダーの世界ランキング１位で最後に登場した安楽は、最初のアテンプトでの失敗を見事に修正して第１課題を完登。さらに第２課題、最初のトライで流れるようなクライミングを披露。超難関の第２課題を軽やかに登り切った瞬間、会場には割れんばかりの歓声が響いた。その後の課題は２つずつゾーンを獲得し、69点で単独首位に立った。

２度目の五輪を戦う楢崎は17番手で登場。第３課題までゼロ完登と嫌な展開だったが、巧みなボディバランスで最終課題を完登し、54.4点までポイントを伸ばして安楽に続いた。

【８月６日　女子Ｂ＆Ｌ ボルダー準決勝】

大会２日目は女子ボルダーが行われ、日本勢は４課題中２完登した野中生萌が64.4点で７位、同じく２完登した森秋彩が54点で11位につけた。首位は五輪連覇を狙うスロベニアのヤンヤ・ガンブレット。全課題を完登して99.6点だった。

前日の男子準決勝に比べると完登数は増加。20人中14人がいずれかの課題を登り切った。

Jan Virt - Mens Boulder & Lead Semifinal - 楢崎 智亜

Jan Virt - Womens Lead Semis - 野中 生萌

15番手で登場した野中は、得意とするフィジカル系の第１課題をゴール取りに失敗した直後の３トライ目に攻略。コーディネーション系の第２課題も完登した。第３課題は２つ目のゾーン到達で10点、第４課題は１つ目のゾーン到達で５点を獲得し、合計64.4点で７位だった。森は苦手のランジが決まらずに第１課題を０点で終えたが、第２課題の完登で挽回。第３課題は中盤で再びランジが届かず、大得意のバランス系課題を最後に決め切って笑顔を見せた。54点の11位に終わった。首位に立ったガンブレットは唯一の全４完登。２つの一撃で金メダル最有力候補という前評判通りの力を見せつけた。

【８月７日　男子Ｂ＆Ｌ　リード準決勝】

大会３日目は２種目の合計ポイントで争うB&L種目の男子リード種目が行われ、競技終了時点で合計137点とした日本の安楽宙斗が総合１位で決勝進出を果たした。楢崎智亜は66.5点で総合10位に終わり、決勝進出の８位以内に入れなかった。

準決勝のルートは非常にハードな内容となった。下部のパートから上半身を中心に体力を削っていき、半数の選手は30点にも満たなかった。

安楽はトウフックを用いるなどして難なく60点台に入ったが、余力を残した様子で落下。リード種目では４番目となる68点を獲得し、ボルダーでの69点と合わせた137点で堂々のトップに立った。

楢崎はスムーズな出だしに見えたが、６名が落下した序盤核心でまさかの落下。12.1点にとどまり、ボルダーでの２位から10位へと転落し、東京オリンピック４位の雪辱は叶わなかった。

【８月８日　女子Ｂ＆Ｌ　リード準決勝】

大会４日目は女子準決勝のリード種目が行われ、トップホールドにタッチする１位タイの96.1点を獲得した森秋彩が総合4位で決勝進出を決めた。東京オリンピック銀メダリストの野中生萌は決勝進出ライン下となる９位に終わり、２大会連続のメダルには届かなかった。

半数の選手が100点中30点に満たなかった前日の男子準決勝とは打って変わり、女子は結果的に半数以上が50点以上に達した。それでも気の抜けないルート内容で、途中にパワー系のムーブが入り、上部の攻略には高い持久力が必須となった。

日本勢は15番手で野中が登場。60点を手にすれば決勝進出が確定する状況だったが、結果は51.1点。決勝進出は後続の結果次第となった。

森は決勝進出に64点が必須となった中で、世界ランキング１位の実力を十分に発揮していく。60点手前の距離のある一手も勢いよくムーブを繰り出して突破。持ち手が細かい１手４点のセクションは難なく進んでいった。最後はトップホールドをとらえ切れずに落下し、悔しそうな表情を見せるも、96.1点を得てオリンピックのファイナリスト入りを果たした。

最後に登るヤンヤ・ガンブレット（スロベニア）も余裕の様子で最終盤へ。完登こそ決め切れなかったが森と同じ96.1点を獲得。ボルダーとの合計は195.7点となり、２位に38.8点差をつける圧倒的な成績で１位に立った。野中は９位へと後退して２度目のオリンピックが終了。決勝進出圏内の８位との差はあと１手分の0.8点だった。

【８月９日　男子Ｂ＆Ｌ決勝】

大会５日目は男子決勝が行われ、17歳の安楽宙斗が銀メダルを獲得。日本男子にスポーツクライミング初のメダルをもたらした。金メダルは安楽とユース大会で競い合ってきた英国の19歳、トビー・ロバーツが手にした。銅メダルにはヤコブ・シューベルト

（オーストリア）が２大会連続で輝いた。

決勝には準決勝の上位８人が進出。安楽は首位でファイナリストに名を連ねた。先に行われたボルダーは５人が完登発進した。一手ごとに距離のあるこの第１課題を、最後に登場した安楽はあっという間に攻略。この課題初の一撃で25点を獲得し、世界ランキング１位の実力を見せる。

Lena Drapella - Mens Lead Semis - 安楽 宙斗

垂壁に設けられたバランス系の第２課題でも安楽は躍動。細かいステップを刻んで慎重に進んでいくと、まるでシューズとホールドが磁石で付いているかのような安定感でホールドを踏んでいく。そしてこの課題唯一となる完登を、残り約10秒で決めた。

パワーが求められる第３課題は、ムーブを起こすのに手間取ると大きく体力を削られていく内容。ここはロバーツのみが登り切り、安楽との１完登差を埋めることに成功した。安楽はゴール下まで近づくも３連続完登はならなかった。

最後は躍動感あふれるコーディネーション系課題。トップホールドまでの距離は2.3mあり、スイングで勢いをつけた上で飛び出し、着地を挟んで２つの小さな穴が開いたポケットに指を命中させるという難関となった。安楽は完登目前に迫るも指はハマらなかった。ボルダーラウンドは２完登した３人が上位に入り、安楽が69.3点で１位、ダフィーが68.3点で２位、ロバーツが63.1点で続いた。

リード種目では、キャンパシングのパートが複数設けられるなど選手の体力を徐々に奪っていった。しかしリードを得意とする選手が揃ったことで、８人の平均は80.8点と好成績が続いた。中でもリードのスペシャリストとして名高いシューベルトは驚異的な粘りで完登目前の96点まで高度を伸ばす。そして、シューベルトの直後に登ったロバーツは完登まで２手となる92.1点を獲得。ボルダーとの合計155.2点でシューベルトを抜き去った。

最後に登る安楽とロバーツは85.9点差で、84点から88点への一手をつかむと金メダルが決まる状況。安楽は着実にムーブを重ねていき、１手につき４点を得られるセクションに突入する。さらに銀メダルへのムーブを決めて、残すは金メダルへの道のみ。しかし、ボルダーでの消耗も影響したのかリズムが悪くなり、80点のホールドに手を出して落下した。

リードのスコアは５位となる76.1点で、合計は145.4点。ロバーツには約10点及ばず、金メダルを譲る結果となったが、大会を通して素晴らしいパフォ

Lena Drapella - Men's Lead Finals - 表彰台

ーマンスを見せてくれた安楽が銀メダルという素晴らしい結果を日本にもたらした。

**＜男子ボルダー&リード｜総合成績＞**

**1位：トビー・ロバーツ（GBR）**
155.2pt（B 63.1pt／L 92.1pt）
**2位：安楽 宙斗（JPN）**
145.4pt（B 69.3pt／L 76.1pt）
**3位：ヤコブ・シューベルト（AUT）**
139.6pt（B 43.6pt／L 96.0pt）
**4位：コリン・ダフィー（USA）**
136.4pt（B 68.3pt／L 68.1pt）
**5位：ハミッシュ・マッカーサー（GRR）**
125.9pt（B 53.9pt／L 72.0pt）
**6位：アダム・オンドラ（CZE）**
120.1pt（B 24.1pt／L 96.0pt）
**7位：アルベルト・ヒネス・ロペス（ESP）**
116.2pt（B 24.1pt／L 92.1pt）
**8位：ポール・ジョンフ（FRA）**
78.4pt（B 24.4pt／L 54.0pt）

――――――

以下、準決勝日本選手結果
**10位：楢崎 智亜（JPN）**

【8月10日　女子B&L決勝】

大会最終日は女子決勝が行われ、スロベニアのヤンヤ・ガンブレットが五輪2連覇を達成した。2位はブルック・ラバトゥ（米国）、3位はジェシカ・ピルツ（オーストリア）で、ともに五輪で初のメダルを獲得。日本の森秋彩は総合4位に終わるも、リードで1位の96.1点を獲得する見事な登りを見せた。

ボルダーラウンドはダイナミックな第1課題を8人中6人が完登。各選手がスタート直後とゴール取りのランジを次々と決めていき幸先のいいスタートを切った。森はスタートポジションへのジャンプが一度も届かず、ノースコアに終わってしまった。

第3課題は4人を終えて完登なし。ここで挽回したい森は両手での持ち替えや見事なポジション取りで中盤を突破すると、レストも挟みながら冷静にムーブを起こして会心の完登を決めた。

コーディネーション系の第4課題は、各ゾーンの獲得が一筋縄にはいかず、さらに飛び出した後に複雑な手順のムーブが待ち受けるゴール取りも難度が非常に高く、誰もトップホールドにはたどり着かなかった。ボルダーラウンドを終えてガンブレットが84.4点で首位。しかし2位ラバトゥとはわずか0.4点の差だった。3～6位は59点台で、森は39点で7位。得意のリードでごぼう抜きも可能な位置につけた。

リード種目では、結果的にリードを得意とする選手が1手につき4点を得られる最後のセクションに次々と達していった中で、5番手の森が違いを見せる。大舞台での完登を目指して順調に高度を上げていくと、60点を超えても長いレストは挟まず、抜群の保持力、持久力で一手を重ねていった。

完登に近づくにつれて声援も大きくなっていく中、トップホールドにあと一手まで到達。最後は繰り出した右手が決まらず、落下してしまったが、会場はスタンディングオベーションで森を迎えた。しかし

Lena Drapella - Women's Lead Finals - 森 秋彩

本人は完登を逃したことで悔しい表情を見せた。

96.1点を加え、総合１位へと浮上した森だったが、残り３人が高得点でメダル圏内に入っていく。トリを務めたガンブレットは84.1点を獲得し、合計168.5点で２位のラバトゥに12.5点差をつけての戴冠。計り知れないプレッシャーから解き放たれ、涙の五輪連覇を達成した。

３位はピルツで147.4点。４位の森との差は12.3点だった。惜しくもメダルには届かなかった森。しかし、彼女のその登りは観る者を魅了したに違いない。

**＜女子ボルダー&リード決勝｜総合成績＞**

**１位：ヤンヤ・ガンブレット（SLO）**
168.5pt（B 84.4pt／L 84.1pt）

**２位：ブルック・ラバトゥ（USA）**
156.0pt（B 84pt／L 72.0pt）

**３位：ジェシカ・ピルツ（AUT）**
147.4pt（B 59.3pt／L 88.1pt）

**４位：森 秋彩（JPN）**
135.1pt（B 39.0pt／L 96.1pt）

**５位：エリン・マクニース（ GBR）**
127.6pt（B 59.5pt／L 68.1pt）

**６位：ソ・チェヒョン（KOR）**
105.0pt（B 28.9pt／L 76.1pt）

**７位：オセアニア・マッケンジー（AUS）**
104.8pt（B 59.7pt／L 45.1pt）

**８位：オリアーヌ・ベルトン（FRA）**
104.5pt（B 59.5pt／L 45.0pt）

――――――

以下、準決勝日本選手結果

**９位：野中 生萌（JPN）**

（climbers 記事引用）

## ４．競技後の総評と反省

目標であった「金メダルを含む、複数メダルの獲得」を達成することができなかったが、選手達のパフォーマンスは目標に近似の内容であったと評価する。

ルール変更によりパフォーマンスポイントを利用するため少しのミスがポイント差になることで先の読めない大会になることはわかっていたが、ルート・課題のタイプが選手の結果に反映したように思う。最終的には日本選手の多くがリード種目に苦しめられたように思う。施設の充実も含めて選手強化できる拠点の充実は今後の課題になった。

東京大会とは異なり、有観客で行われた競技では多くの声援と素晴らしい雰囲気の中で競技でき、スポーツクライミング競技やスポーツの素晴らしさを伝えられたように思う。またラッキーなことに競技が午前中だったこともあり、日本の方は見やすい時間帯に観戦していただき、初めて競技を見たと言う声も帰国してからたくさん耳にした。これを機に、クライミング普及に繋がることも期待している。

パリへの道は昨年の世界選手権ベルン大会とオリンピック予選シリーズ（上海大会・ブタペスト大会）と長くて厳しい選考レースだったが、多くの素晴らしい日本代表選手達が挑戦し、互いにしのぎを削る中で更に成長し、日本代表チームをより強くした。そして、私たちはこの流れを次のロサンゼルス2028オリンピックへ繋げる必要がある。まだまだたくさんの課題があるが、もっと強いチームになるよう止まることなく次のステップへ歩みを進めたいと思う。最後に、世界中のクライミング仲間たちと共にクライミング界の益々の発展、スポーツの価値の向上に寄与できるよう、JMSCAが一丸となってさらなる高みへ登っていきたいと思う。